

木下尚江における静坐と岡田虎二郎

鄭 玆 汀*

Seiza Meditation and Torajiro Okada for Naoe Kinoshita

CHUNG Hyunjeong

Naoe Kinoshita told people around him that he suffers from depression. This was causing her various difficulties in his social activities. During this time, he came across Torajiro Okada's Seiza meditation. In the period after the Russo-Japanese War, the physical and mental health issue attracted many people's attention. The Shuyō mental training boom was one such phenomenon. A representative example is the "Okada method of Seiza meditation," invented by Torajiro Okada. This paper discusses the relationship between the Shuyō mental training boom of the time and "nervous breakdown". It also attempts to reconsider the Okada method of Seiza meditation in relation to the "depression of early old age" brought about by the Russo-Japanese War. The role of Kinoshita in developing the Okada method of Seiza meditation is also highlighted. The author clarified Torajiro Okada's ideological tendencies and limitations through Kinoshita's commentary. In addition, his encounter with the common people via Okada and with Isomaru, a fisherman poet, profoundly influenced his later life. It is also noteworthy that in the course of his Seiza meditation, Naoe conducted systematic research on Kamakura Buddhism and the historical significance of the advent of Jesus.

キーワード：木下尚江, 静坐, 岡田虎二郎, 日露戦争, 修養, 神経衰弱

Key Words : Kinoshita Naoe, Seiza, Okada Torajiro, the Russo - Japanese War, Shuyō mental training, nervous breakdown

はじめに

日露戦争期は尚江が最も旺盛な活動をしていた時期である。そしてその頃から彼の苦悩も深まっていく。彼は自分のなかにある「みょうもんりたつ名聞利達」の欲望に気づくようになった。それにはきっかけがあった。1906年5月6日、尚江の母くみが永眠したことである。8日に

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

キリスト教式の葬儀が行われ、司会者は根橋亀之助がつとめ、尚江は遺族代表として感懐を述べた。「自宅捜策の名目をもって警察権の侵入のために、病床の母を驚かし、母の寿命を縮め、その不孝の罪を償^{つぐな}うことができない」¹⁾云々。午後三時霊柩は南部坂の家を下りて、青山に相対する新墓地立山に向かった。後に尚江と妻みさ子、息子正造夫婦もそこに眠るようになる。

「母の死によって、予は多年の暗き夢から醒めた。我が母はかつてその子に向って革命軍の大將、無政府国の帝王などを希望したことはない」²⁾と、これまでの自分とは決別するという覚悟をするようになる。というのは、尚江はいつか指導者になり名声を馳^はせることで親孝行したいと思っていたからである。しかし、彼は母の死をきっかけに、それがまったくの勘違いだと分かった。彼は「胸中の矛盾撞着、不徹底、支離滅裂」と自分自身を描写しているが、その詳細についてははっきりと捉えることはできない。彼は社会運動から離れる決意をし、同志たちにその旨を伝えた。尚江は悶々としながら、自らを導いてくれる人を求めている。そこで出会った人物が岡田虎二郎である。

1. 岡田との出会いと修養ブーム

尚江夫婦には子供がなく、妻の願望で養女を迎え入れた。最初は純枝^{すみえ}、それから男児（木下正造と命名）を養子に迎え入れて愛情を注いだ。最初、幼い子のわがままな行動に尚江は慣れなかつたらしく、つついり叱りつけたりする自分に対し不甲斐なさを感じ、岡田式静坐に赴いたというが、それだけでなく、すでに静坐会に参加していた病身の妹伊和^{いわ}に強く勧められた時から岡田虎二郎に関心をもつようになったという³⁾。

やがて尚江は岡田に会いにいった。1910年5月のことである。それを機に静坐を始めた。座って一息ごとに丹田に力を入れる。ただこれだけのことだったが、尚江と妻の操子が静坐を通して知ったのは「肉体の変革は即ち精神の変革だ」という認識に至るようになったという⁴⁾。このように尚江は岡田式静坐によって、精神は緊密に身体に結びついてると心の底から思うようになったのである。

尚江の修業の様子は、市ヶ谷刑務所に収監されていたアナキスト赤羽^{あかばはじめ}一宛の手紙（1910年7月）によく示されている。赤羽は一時期、在米日本人の社会主義運動の先駆者的位置にあった。彼がアメリカからの帰国の船中で、聖書と共産党宣言を毎日、日課として読んでいた⁵⁾ことは、彼の思想の根幹を示す逸話である。赤羽は『新紀元』誌上にもしばしば文章を発表している。尚江は手紙のなかで「従来獄窓は読書のところ」と見なされているが、「小生は大兄が読書よりもむしろ^[ママ]禅座の道場とせられんことを深く望む」「愛」は議論より来らずして修業より生ず」と強調しつつ、「福音書と法華経」を読むこ

とを勧めている⁶⁾。また、尚江は同年12月、赤羽から質問を受けたのだろうか、静坐のやり方とその効用についてつぎのように説明している。このような静坐の方法に関する具体的なことを、彼はほとんど書き残さなかった。そういう意味で注目に値する。

「坐ながらにして全仏国土を透視するの御修行の程伏して待望仕候。

腹に力を満たせよ。腹に力を満たせたままに呼吸せよ。胸を張る勿れ。胸部を空虚にせよ。一に臍下丹田たんでんに身心の中心を置け。行住坐臥ぎょうじゅうざがにこの一事の御工夫をお勧め申上候もうしあげ。身心一如なり。坐禅も念仏も祈禱も一にここに在り。この極めて愚かなるところに無限智は包蔵せらる。ぜひとも御実験を乞う⁷⁾」

ところで、この岡田式静坐というのは、いきなり現れたものというより、時代的背景がある。それについて少し述べてみたい。

明治30年から40年代には新渡戸稲造の『修養』(1911年)など、「修養書ブーム」が起こっていた⁸⁾。「修養書」とは「修養」するための「ハウツー物」である。140版を突破するというベストセラーになった⁹⁾新渡戸の『修養』は、人格の修養、自己の向上、身体の鍛練、趣味の涵養、処世の方法など、精神の修養を中心とした徳目を国民に提唱したものである。この時期、修養を語ったのは、なにも新渡戸に限らない。明治後半から大正にかけて「修養」が一大思潮になった¹⁰⁾。清沢満之の雑誌『精神界』(1901年)、網島梁川の「見神の実験」(1905年)、西田天香の修養団体である一灯園(1905年)、伊藤証信しんの無我苑(1905年)、蓮沼門三はすぬまもんぞうの修養団(1906年)、「少林会」による禅学的雑誌『修養』(1907年)、田澤義鋪たざわよしはるの青年団運動(1910年)などが挙げられる¹¹⁾。よく知られているように、河上肇は『読売新聞』に連載していた「社会主義評論」を中断し、職をなげうって無我苑の「無我愛」運動に一時没入した。彼と交友し、山口孤剣や荒畑寒村とともに平民社の「行商伝道」で有名だった小田頼造も社会主義運動から離れ、「無我愛」の信仰に入った¹²⁾。

社会民主党の創立者の1人だった西川光次郎の場合も、そのようなブームに積極的に関わった一例であろう。西川は札幌農学校での新渡戸の教え子だったが、尚江らとともに社会主義運動に挺身し、四度も投獄された経験をもつ。しかし大逆事件の検挙が行われた年の夏に出獄するや、社会主義から離脱を宣言し、以後、死去するまで修養運動に専念した。彼は自働道話社を設立し、『自働道話』という修養雑誌を長年発行したが、その目的は「第一、日本国民の良心覚醒運動 第二、道德の日用化(愛国心の日用化)、第三、社会奉仕」であった¹³⁾。西川の場合は思想的変質も読み取れる。

概していえば、多くの青年が参加した岡田式静坐法もその流れにあるといえよう。ただ

し久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』によると、「輸入品の重荷によるめく自分の姿にみにくさを感じた知識人にとって、岡田式静坐法は何か自分のしぜんのスタイルに根ざした生活美学をあたえた。この新興宗教が、他の大部分の新興宗教のように天皇崇拜におもむくこともなく、社会的反動勢力と手をむすぶこともなく、教祖の若死によってお家騒動を起すこともなく消滅し、虚無主義の思想運動として最初から最後まで一貫したコースを歩みきったのは、日本思想史上に特筆大書されてよい」¹⁴⁾ という好意的な評言もある。興味深いことに、鶴見俊輔氏は岡田式静坐法を「虚無主義の思想運動」と捉えているのだが、それは少し大げさというか、的外れな評言といわざるをえない。木下尚江に深く傾倒していた鶴見氏は、岡田式静坐法も積極的に評価しようとしたのではないだろうか。

上述のように修養運動を通じて「愛国心」を説くようになった西川の場合は、その国家観においてもいわゆる転向的な変質が起こったといつてよい。しかし尚江は、西川の場合と異なり、国家主義の克服こそ日本国民の最大課題であるという立場は依然として変わらなかった。

2. 身体の発見

さて、「静坐」とは何か。静坐は、静かに座って心を静め、内面に意識を傾注してゆく実践だといえる¹⁵⁾。それでは「岡田式静坐法」とは具体的にどのようなものなのか。栗田英彦氏はつぎのように説明している。

「岡田式静坐法とは大正期に一世を風靡した心身修養法である。定められた呼吸と姿勢を保持して丹田（たんでん）に力を込め、ただ坐るだけという簡便なものであったが、知識人・教育者・学生を中心に多くの実践者を生んだ。創始者の名は岡田虎二郎^{おかだ とら じろう}という。彼は小学校を卒業してすぐに農業に従事し、特に宗教に関わったり、専門教育や高等教育を受けたりしたわけではなかったが、1901年突如として農業を辞してアメリカへ単身で遊学（1905年まで）、帰国後に東京で精神療法の看板を掲げて活動を開始した。現在知られている岡田式静坐法の形式は、1908年末頃までに定められたようである。1910年には雑誌『実業之日本』に静坐について記事が連載されるようになり、多くの信奉者を得るようになった。（中略）健康法としての効果に加えて、近代化の矛盾と伝統の桎梏^{しごく}のなかでもがく人々を惹きつけることになったのだろう。1911年に中心的な静坐会場となる日暮里の本行寺^{ほんぎょうじ}における静坐会が始まる。1912年に実業之日本社編『岡田式静坐法』（執筆者は記者であり岡田ではない）が出版され、岡田式静坐法の人気を決定づけた。その後も東京の各所で静坐会が行われるようにな

り、最盛期には東京だけで127箇所にも達し、岡田はそれらの会場を全て巡回して指導していた。

しかし、岡田虎二郎は1920年に尿毒症を患って急逝する。一種の健康法としても受け止められていた静坐法の指導者が急逝したことは支持者を失う大きな原因となった。また、この流行が岡田虎二郎という個人の魅力によっていたことも大きかった。新宿中村屋の相馬黒光は、岡田の生前は十年間本行寺に1日も欠かさずに通ったが、岡田の死後は一切行くことはなくなった。黒光は静坐法を健康法以上のものと捉えていたが、岡田以外にそれを指導できる人物はいないと確信していたのである。本行寺の静坐会には一時期後継者として、岡田の高弟であり、社会主義運動家であった木下尚江が推されて指導にあたったが、参加人数の減少から結局は閉鎖されるにいたった¹⁶⁾

上文中にある書籍『岡田式静坐法』（実業之日本社、1912年）は、当時早稲田大学学長の高田早苗をはじめ、天野為之（早稲田大学教授）、鈴木充美（前内務次官）らとともに尚江も執筆者として名を連ねている。尚江も「余が思想の一大転化は静坐の賜物也」と題する文章を書いているが、この文をめぐる社会主義陣営から非難を浴びようになる。確かに、堺利彦をはじめとした同志らに不快感を抱かせるような書き方でもある。

この文集は岡田式静坐法の効用を広く宣伝するためのもので、その意図に応える記述であることを念頭に置いて読まなければならない。ただ、この尚江の文章を、骨身を惜しまず働く社会主義運動の同志の立場から読む場合、彼等の活動の意義をあまり評価しようとしない居高な態度と受け取られるだろう。常に彼特有の話法はしばしば誤解を招く恐れがあるが、とりわけこの文は真意が掴みづらく、「雄弁のみならず、又文筆に長じている」¹⁷⁾ ふだんの尚江とは違って、粗雑な文章になっている。しかも誤解を招きかねない箇所も少なくない。さて、その原因はどこにあるのか。この尚江の文章は「我が胸中の矛盾撞着、不徹底、支離滅裂」「不安に苦しんだが、常に自ら欺いて、強いて目前の弥縫に努め」「名聞利達の情欲に駆られ」「精神的疲労の我が姿」というような陰鬱な表現に満ちている¹⁸⁾。この時期、尚江の心身はまさに渾沌とした状態にあったということが出来る。全体的に見てやや慎重さに欠ける記述も散見されるので、同志から非難を浴びるのも避けられなかったといえる。

ところで、岡田は「書いたものは誤って読まれることがある」といって、著書も出さず、日記も残さなかったので、当時の静坐の具体的な様子については捉えきれない部分も多く、「岡田の高弟」尚江と岡田との精神的交流の詳細についても十分に把握することは困難である。推し量って考えると、“身体”に無頓着だった知識人らが静坐を通して、よ

うやく自分の身体に目を向けさせられて新鮮な衝撃を味わったのではないだろうか。そして静坐法には特定の宗教色が無いゆえに、誰でも気軽に参加できるのも、多くの人々を惹きつけた要因だと思われる。

明治期の「身体」運動といえば、1886年、諸学校に導入された「兵式体操」、そして「運動会」が挙げられる。特に国家儀礼を確立するための学校行事や運動会に対して尚江は一貫して厳しく批判し続けた。その一例として、伊香保在住の時、尚江は天長節に小学校の運動会を見にいったが、猫背の校長が教育勅語を朗読し「厳粛な礼拝」のようだったと、「一旦緩急あれば」という所に至って、尚江に付いて来た宿の黒犬が吠え始めたので、幼児が泣き出し、彼が杖の頭で犬の顔をなでてやったが、さらに声高く吠えだしたという。号令に従って子供たちが「機械のようによく動く」「兵式操練」で運動会は締めくくられた¹⁹⁾。

だが、明治期の「身体」への着目は、そうした国家主義的なものだけとは限らない。尚江とともに『新紀元』を発行し、キリスト教社会主義運動を挙げた安部磯雄は現在、「日本野球の父」「学生野球の父」としてむしろ有名である。彼は早稲田大学教授時代に野球部を創設し、野球の普及・発展に大きな功績を残した。安部が1905年、早稲田大学の野球チームを率いてアメリカに遠征²⁰⁾したことは、日本の野球史に刻まれる出来事だった。早大野球部のホームグラウンドは現在、安部磯雄記念野球場（安部球場）と呼ばれているほどである。とはいえ、当時、安部の野球熱については、尚江ら周囲の社会主義者たちは関心すら示さなかったのである。

ところで、1911年8月29日から9月19日にかけて、『東京朝日新聞』に「野球とその害毒」という野球批判キャンペーンが掲載された。第一回目として、第一高等学校校長・新渡戸稲造の談話が記されている。新渡戸にとって野球は、「神経を鋭くしてやる遊び」であり、「修養」とはかけ離れたものであった。おそらく新渡戸において「修養」とは精神領域に関するもので、身体性は副次的なものだったのではないだろうか。尚江の場合も自分の身体的問題よりも、むしろ精神的治癒を求めて岡田に近づいたといえる。一方で安部が部員の指導において一番重んじたことも、部員の精神面の修養であったが、彼の場合は、身体と精神の均衡のとれた近代的な人間像を求めていた。それに対して、新渡戸の「武士道」、岡田・尚江の「静坐」は「身を修める」という東洋的な身体文化に裏打ちされたものといえる。身体性への関心といっても、安部と尚江とは、画然たる違いが見られる。

3. 日露戦後の心の病的状態と静坐会

さらに、岡田式静坐ブームの火付け役の存在を忘れることはできない。それは、社会主義結社「平民社」「新紀元社」の財政を支え、また田中正造や尚江など社会運動家の生活を支援した実業家、逸見^{へんみ}斧吉^{おのきち}である。三陽堂（現在のサンヨー堂）という製缶会社の経営者の逸見、尚江、そして田中正造、この3人はお互いを深く敬愛し、艱難を共にしながら、さらなる向上をめざして歩調を合わせて歩んでいった。こうした親密な関係の力動性は、尚江の全生涯をつらぬくものであり、人と人との関係性が開く新境地を示しているともいえる。彼らはお互いの尽力なしには、歴史にその名を刻むことができなかつたかもしれない。岡田式静坐法にしても、木下尚江の助力があつてこそ、多くの人が引き寄せられる形式と内容を備えるようになったといえる。

逸見が書いた「岡田虎二郎先生に対する私見」によれば、「静坐の会合の数多くあつた中に」岡田は特に海陸軍人の集会と高等師範教員たちの会合を重視したという。岡田は常に「軍人の精神が日本を滅ぼす」といい、「国家主義教育を排斥」する立場から「国家主義教育の本山、高等師範の教員等のために、一の特種会合を企て」たという。「明治の初年、ルソーの民約論ばかり読んで、肝腎なエミールを忘れていたことが大きな間違であつた」と、岡田は繰り返し語り、プラトンのリパブリック、ルソーのエミール、これは世界の二大教育書であるといつて、毎度青年たちにその熟読玩味を勧めた²¹⁾。岡田式静坐が単なる「肉体の変革」をめざしたものではなかつたことが逸見の文章からもうかがい知ることができる。

岡田の生まれ故郷（現在の愛知県田原市田原町）にある田原博物館で近年開催された「没後90年 岡田虎二郎展」（2010年）の「作者略歴」には、「キリスト教社会主義の文学者の木下尚江が、思想的行きづまりから虎二郎を訪ね、その指導と助言で安心立命を得た頃から坐の形式が確定し、世に「静坐」と呼ばれるようになった」という記述からも、尚江の助力の様子を察することができる。

なお筆者は「木下尚江翁遺稿 磯菜かご」という「静坐社資料」を、国際日本文化研究センターから取り寄せたことがある。1938年11月5日、木下尚江一周忌に、息子の木下正造が記念として京都市の静坐社に寄贈したものである。この遺稿の冒頭に、尚江の娘婿である伊藤正治の寄稿文が載せられている。船乗りだった伊藤は尚江が岡田式静坐へ赴くきっかけをつくつた養女、純枝と結婚し、尚江の婿となつた人である。彼が尚江に出会つたのは、岡田の静坐の場であつた。興味深いことに、岡田式静坐を通して、尚江は心身の平安を得るとともに、さらに静坐会から婿を迎え入れるようになったのである。尚江と

ずっと同居していた娘婿の伊藤は尚江についてこう語っている。

「故人はよく「俺はどうも無智で……」といい、一家の中の誰のいうことも真面目に聞いてくれた。側で聞いていて馬鹿らしいようなことでも、始終温和な微笑を湛えながらよく聞いてくれた。それ故、皆の者も、故人に色々話すことを楽しみにしていた。(中略)一家は極めて平和に和気藹々たる団欒の日を送り得て、真に幸福な家庭であった。(中略)故人は家庭にあってむずかしい話などしたことは、全くなかった。いつも子供のように無邪気で、正直で、ほがらかであった。(中略)しかもその父がやはり暗夜航路の灯台であったことは、いうまでもない。必要時には閃光が稲妻のごとくきらめいた」と語っている²²⁾。

岡田虎二郎は朝起きると、冷水浴を行い本行寺へ向かう。毎朝六時開会。すでに参加者は本堂に200人ばかり、思い思いに坐っている。それぞれの姿形を正し、短い感想を述べる。3、40分ののち目を開かせ散会。相馬黒光によれば、本行寺の静坐会が済んだ後、その日のスケジュールにしたがって十数箇所の静坐会を歴巡していたという。その岡田の行く先々へ、木下尚江ら大勢の人たちがぞろぞろついてまわっていたと述懐している²³⁾。精神的に苦しんでいた黒光に岡田を紹介したのは尚江であった²⁴⁾。黒光は「岡田式静坐法」により大きな平安を得たというが、彼女も岡田に深く傾倒した1人である。

この静坐法は一世を風靡し、岡田虎二郎の信奉者は、閑院宮・東伏見宮夫妻など皇族、徳川慶喜・慶久など華族、安田善次郎・渋沢栄一ら財界人、新宿中村屋創業者の相馬愛藏・黒光夫妻、高田早苗・坪内逍遙・浮田和民・岸本能武太など主に早稲田大学関係の学者、さらに小説家の中里介山、劇作家の島村抱月など、各界の著名人から学生、庶民に至るまで、1万人を超える人が静坐会に加わっている²⁵⁾。それに、社会運動関係は木下尚江、逸見斧吉、田中正造、石川三四郎、福田英子などがいた²⁶⁾。

特に田中正造に関していえば、^{ほらだきだすけ}原田定助宛書簡には「日夜^{脳病}に苦しめり。正造の^{脳病}は(中略)全く無形病にて、医師にも分り兼ねるものなり」²⁷⁾と書かれている。後日、田中の回想によると、^{あらいおうすい}新井奥蓬に「神経病」といわれて諭されてから、却って精神が落ち着いたという²⁸⁾。その田中が1913年4月25日の日記に、「予は静坐によりて天下の大道を^{する}」²⁹⁾と書き記しているのも静坐を通して心的平安を得ることができたからであろう。田中正造の秘書役でもあり『田中正造の歌と年譜』(1934年)、『田中正造余録』(1972年)の著者、島田宗三は、次のように語っている。「田中翁はよく言われていましたよ。「木下君はちかごろ目ばかりつむっていて、なにを聞いているんだか、どうもはや困りました」と。田中翁も、静坐というものが非常によいものだということは承知していたんですけれ

ども、木下さんと同一系統にはいかなかったんですね³⁰⁾。この鳥田の話は、岡田式静坐に参加した人は、それぞれの内的要因や思い入れの度合いが違うということを示している。それゆえ、十把一絡げに考えるには無理があるという指摘である。

ところで、岡田式静坐には夏目漱石夫人も顔を出している。それと関連する文章が、『蘆花日記』に記されている。蘆花は1917年8月4日の日記にこう書いている。

「岡田静坐の力」を瞥見。少し気障^{きざ}なところがある。漱石が友からすすめられ、“神経衰弱は文学者の資本”とあって斥けた。神経衰弱の読者には、神経衰弱文士の書いたものが必要云々と悪口をいっている。俺も漱石と同意見だ³¹⁾

このように、漱石、蘆花、尚江、漱石夫人、それぞれ意見と立場が違っても、ここまで人口に膾炙されていたことから、岡田虎二郎の静坐が当代の社会的現象であった事実を確認することができる。それとともに、漱石が静坐を「神経衰弱」に関連づけて評していることに注目したい。確かに、当時の座禅・静坐ブームと「神経衰弱」とはお互い無関係ではなかった。松本時代以来の尚江の親友で「ハイカラ」という語を最初につくったといわれる石川半山は、神経衰弱経験記の『神経衰弱及びその回復』（1909年）を著したが、「神経衰弱」はまさに当代随一のキーワードになっていた。石川によれば、日露戦争の当時、息子の戦死の報がとどくと、座禅三昧に入って、出世間の工夫をする人々のことを紹介している³²⁾。この頃すでに「初老期鬱病」という概念が輸入されていた。なにしろ日露戦争の戦死・病死者は8万8,133人、その多くが徴兵された兵士だが、この戦死者の父母のなかには初老期鬱病になる場合が少なくなかったという。

日露戦後、夏目漱石は「恐るべき神経衰弱はベストよりも劇^{はげ}しき病毒を社会に植付けつつある」³³⁾と、自らの経験と照らし合わせて、鬱屈した時代を代弁している。漱石は『吾輩は猫である』の腹案にもなった「断片」（1905、1906年）において、つぎのように述べている。「Self-consciousnessの結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり。人智、学問、百般の事物が進歩すると、同時にこの進歩を来したる人間は一歩一歩と頹^{たいはい}廢し、弱す」³⁴⁾。漱石がこうした考えに至るまでには、周りの人々の影響も大きいただろう。漱石本人はもちろん、東大講師を勤めた時の教え子のなかにも、鈴木三重吉は神経衰弱とあって休学し、野間真綱は憂鬱病か神経衰弱の疑いを、森田草平は心の病的状態を訴えてきた³⁵⁾。1906年、尚江も「僕は今年に入りてより心身共に常にいささか異状あり、非常なる懶惰^{らんだ}の月日を送り来たれり」³⁶⁾と石川三四郎に伝え、晩年においても「予に憂うつの疾^{やまい}あり」³⁷⁾と語っている。

日露戦後の「神経衰弱症（neurasthenia）」³⁸⁾はまさに社会的現象だったのである。神経

衰弱とは、アメリカ人医師 G.M.Beard が19世紀後半に提唱した診断名であり、疲労や頭痛、抑鬱、性的不能などを主たる症状とし、その本態は外界からの刺激による中枢神経系エネルギーの衰弱にあるとされた。この診断名は20世紀初頭の日本でも大衆メディアを通じて人口に膾炙した。とりわけ日露戦争の死傷者急増を契機として日本に広く蔓延し、「時代病」として語られていった³⁹⁾。戦争という時代に翻弄され、閉塞感の強い時代を生きる人々の精神的なもがき、あるいは奮闘の最中に生じた現象と捉えることができる。少し前なら教会に赴いた悩める煩悶青年たちは、今度は心のよりどころを求めて静坐会に足を運ぶようになったのである。

尚江が岡田式静坐を始めてから、キリスト教も捨てたというふうには断じる見方があるけれども、それは性急な判断ではないだろうか。1911年5月に、尚江の家を訪ねた『新潮』記者は、当時の尚江宅の様子をつぎのように描写している。「東京府下の或る村落における、質素なる百姓家。六畳の室の中央に置かれたる粗末なる机、(中略)壁面にはキリスト〔イエス・キリスト〕、トルストイなどの画像の扁額掲げられたるを見る。室の一隅に青き布を掛けたる机を据えたり。雑書、原稿紙、(中略)縁側より、点在せる新録の雑木林、黒き土の田と畑と一即ち武蔵野を望む」⁴⁰⁾という。このごとく、尚江は教会からは離れたが、イエスは常に彼とともにあった。

岡田は1週間に77箇所の会場を指導して歩いた。その過重な活動のせいなのか、1920年、下落合の自宅で47歳で絶命した。健康法の会を主宰していた岡田の急逝に門人たちは動揺し、参加者が激減した。

4. 木下尚江にとって岡田虎二郎とは

1929年10月18日に、尚江は岡田虎二郎の『日記』を根拠に「岡田先生は天皇へは行けなかったが、大分接近された」⁴¹⁾と弟子の青木吉蔵に語っている。また、1933年1月16日には「岡田先生、生きておられたら、僕は先生と別れたであろう」⁴²⁾と、明言しているように、2人の思想的な間隙は容易に埋められるものではなかった。とりわけ天皇をはじめとする歴史認識において、尚江には岡田と相容れない部分があったようだ。

こうした大きな見解の隔たりがあったにもかかわらず、尚江が実りある有意義な関係を岡田と築いたのは、なぜだろうか。その1つとして、尚江が野の人すなわち民衆という観点から世界を眺めようとしていたことが挙げられる。逸見斧吉によれば、岡田は同郷の愛知県田原市伊良湖町の貧しい漁師かすやいさまるの家に生まれた糟谷磯丸という漁夫歌人を「激賞」していた。また森田繁治もこう語る。「岡田先生が磯丸を語られる時は、まるで知己を得たごとくだ」と。こうして尚江は岡田を通して磯丸という漁師歌人を知るようになった。30

歳を過ぎるまで文字を知らなかったという磯丸の歌に接し、むしろ宗教教理や哲学的思想を越えるものを見出した彼はその後、磯丸を日々愛誦するようになった。そして機会あるたびにその歌を手写した。彼は磯丸全集旧版の6,200首から、愛誦すべき78首を選んで手写し、巻頭には彼自身が書いた磯丸肖像を添えて、「磯菜かご」という題をつけて逸見に送ったことがある。それを、尚江の死後、息子の正造が逸見の助力を得て、尚江の一周忌（1938年11月5日）に記念として周りの知人に贈呈したのが、先述の「木下尚江翁遺稿 磯菜かご」である⁴³⁾。尚江が選んだ歌集「磯菜かご」の最後の辺にある歌を記しておきたい。

「みな人をめくみたまへとあけくれにいのるまことを神やうくらん」

「たのもしな年こそへぬれ老か身も若菜にかへる春をむかへて」⁴⁴⁾

磯丸の生誕の地、伊良湖岬までわざわざ訪ねるほど、尚江にとって磯丸は大切な人になった。「伊良湖崎 磯うつ浪や 松の声 君も聞きたり 我も聞くな」「偉大なる 自然詩人の 石碑なし 磯うつ浪や 松風の声」と、彼は1937年10月17日、臨終間近の病床で吟じている⁴⁵⁾。

尚江は人生の目標や生きる目的を見失ってしまった時期に、岡田を通して静かに座ることを実践し、彼の紹介で人生の指針となるような漁夫歌人の磯丸と出会い、自分が進むべき人生の方向性を見出すようになる。「何をなすべきか」ではなく、「いかに生きるべきか」が彼にとって重要な課題になった。

おわりに

さて、尚江にとって静坐はどういう意味をもつのだろうか。彼はこう説いている。

「肉体だの、精神だのと二つに分けて説明する。畢竟説明の上の無理な方便だ。（中略）生命の真の姿は、その生きて働くまを、生きた目を開いて、内から直に見なければならぬ。静坐はすなわちそのための一つの形式だ。釈迦が外道の哲学や、婆羅門の苦行を打ち棄てて、樹木石上に結跏趺坐したのもこれがためだ」⁴⁶⁾

尚江は肉体と精神の間で共通性や相互作用を、静坐を通して理解したといえるだろう。

ところで尚江は、静坐に参加する前から仏教に深い関心を示しており、静坐を始めたころに日蓮（1910年）⁴⁷⁾、法然、親鸞（1911年）⁴⁸⁾ など日本の仏教思想家についての論考を

続けて書いている。また同じ時期、彼はイエス出現の歴史的意義を旧約時代から追跡した論稿（「神に帰れ」1911年⁴⁹⁾）を発表していることにも、注意すべきだろう。彼のなかでは宗教的探求の深化と静坐との間に緊密な関係があったのではないかと思われる。

注

- 1) 有香生（1906）「追悼讃歌」『新紀元』8号、『木下尚江全集』20巻、466頁。
- 2) 木下尚江（1911）「静坐」『野人語（第三）』『木下尚江全集』9巻、212頁。
- 3) 木下尚江（1912）「余が思想の一大転化は静坐の賜也」実業之日本社編『岡田式静坐法』実業之日本社、209-214頁。
- 4) 木下尚江（1911）「静坐」『野人語（第三）』『木下尚江全集』9巻、217頁。
- 5) 藤田美実（1967）「赤羽一に関する覚書—明治期社会主義思想の一つの形成過程」『明治大学教養論集』37号、19、26頁。
- 6) 赤羽一宛木下尚江封書（1910）『木下尚江全集』19巻、68-69頁。
- 7) 赤羽一宛木下尚江封書（1910）『木下尚江全集』19巻、77-78頁。
- 8) 筒井清忠（1995）『日本型「教養」の運命—歴史社会学的考察』岩波書店、14-17頁。
- 9) 澤村修治（2019）『ベストセラー全史【近代篇】』筑摩書房、30頁。
- 10) 瀬川大（2005）「「修養」研究の現在」『東京大学大学院教育学研究科研究室紀要』31号、47頁。
- 11) 大谷栄一（2019）『日蓮主義とはなんだったのか』講談社、185-186頁。
- 王成（2004）「近代日本における〈修養〉概念の成立」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』29巻、117-145頁。
- 12) 平田順（1971）「解説—平民社の社会主義伝道行商」荒畑寒村編『社会主義伝道行商日記』神泉社、265頁。
- 13) 西川光二郎（1926）『活くる道』北文館、2-3頁。
- 14) 久野収・鶴見俊輔（1956）『現代日本の思想—その五つの渦』岩波書店、78頁。
- 15) 馬淵昌也「宋明期儒学における静坐の役割及び三教合一思想の興起について」87頁。
- 16) 栗田英彦（2013）「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料」『日本研究』47巻、240-241頁。
- 17) 堺利彦（1922）『米泥棒』三徳社、289頁。
- 18) 木下尚江（1912）「余が思想の一大転化は静坐の賜也」実業之日本社編『岡田式静坐法』実業之日本社、186-218頁。
- 19) 木下尚江（1907）「山居雑感」『（日刊）平民新聞』1号、『木下尚江全集』17巻、260-263頁。
- 20) 北垣宗治（2008）「安部磯雄における同志社スピリット」（同志社スピリット・ウィーク「講演」記録）
- 21) 逸見斧吉（1946）「岡田虎二郎先生に対する私見」『雑話時報』25巻1号、『木下尚江全集』20巻、389-390頁。
- 22) 伊藤正治（1938）「一年後に」国際日本文化研究センター所蔵「静坐社資料」『木下尚江翁遺稿 磯菜かご』1-4頁。
- 23) 相馬黒光（1977）『黙移—明治・大正文学史回想』法政大学出版局、216頁。
- 24) 新宿歴史博物館編・発行（2011）『企画展—新宿中村屋に咲いた文化芸術』93頁。
- 25) 柳田誠二郎（1983）『岡田式 静坐のすすめ』地湧社、65-66頁。佐藤幸治・佐保田鶴治編

- (1967)『静坐のすすめ』創元社, 63-64頁.
- 26) 斎藤孝 (2008)『代表的日本人』筑摩書房, 181頁.
 - 27) 原田定助宛書簡 (1901)『田中正造全集』15巻, 岩波書店, 265-266頁.
 - 28) 度会好一 (2003)『明治の精神衰弱—神経病・神経衰弱・神がかり』岩波書店, 46頁.
 - 29) 田中正造 (1913)「日記」『田中正造全集』13巻, 岩波書店, 466頁.
 - 30) 田村紀雄編 (1987)『私にとっての田中正造』総合労働研究所, 102頁.
 - 31) 徳富蘆花 (1917)『蘆花日記』5巻, 179頁.
 - 32) 石川半山 (1909)『神経衰弱及其回復』好学会, 27頁.
 - 33) 夏目漱石 (1911)「マードック先生の日本歴史」(下)『東京朝日新聞』『漱石全集』16巻, 岩波書店, 358頁.
 - 34) 夏目漱石 (1905・6)「断片 32D」〔手帳④ 16-30 縦書〕『漱石全集』19巻, 岩波書店, 204頁.
 - 35) 度会前掲『明治の精神衰弱—神経病・神経衰弱・神がかり』182頁.
 - 36) 石川三四郎宛木下尚江書簡 (1906)『木下尚江全集』19巻, 42頁.
 - 37) 稲田雅洋 (1987)『悲壮は則ち君の生涯なりき—深沢利重と木下尚江』現代企画室, 5-6頁.
 - 38) 度会前掲『明治の精神衰弱—神経病・神経衰弱・神がかり』33頁.
 - 39) 佐藤雅浩 (2008)「戦前期日本における精神疾患言説の構図」『ソシオロゴス』32号, 20頁.
 - 40) 木下尚江 (1911)「我等の生くべき道は何処ぞ—木下尚江氏と記者との対話—」『新潮』14巻6号, 『木下尚江全集』20巻, 412-424頁.
 - 41) 青木吉蔵編 (1939-40)『木下尚江翁語録：附・其研究 (1・2巻)』私家版「木下尚江語録」『木下尚江全集』20巻, 492頁.
 - 42) 青木前掲「木下尚江語録」522頁.
 - 43) 森田繁治編 (1967)「木下尚江翁遺稿—磯菜かご」静坐社, 13-15頁.
 - 44) 森田繁治編 (1967)「木下尚江翁遺稿—磯菜かご」静坐社, 14-15頁.
 - 45) 木下尚江 (1937)『病中吟』535頁.
 - 46) 木下尚江 (1912)『創造』金尾文淵堂, 『木下尚江全集』9巻, 281-282頁.
 - 47) 木下尚江 (1910)『日蓮論』文英堂, 『木下尚江全集』8巻, 14-169頁.
 - 48) 木下尚江 (1911)「法然と親鸞」金尾文淵堂, 『木下尚江全集』8巻, 173-370頁.
 - 49) 木下尚江 (1911)「神に帰れ」『木下尚江全集』9巻, 10-36頁.